



説教要旨 「救い主を拒む王」

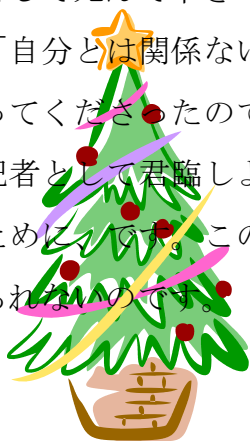
マタイによる福音書2章16～23節

天使が喜びを告げ、羊飼いが馬小屋に来てイエス様を拝み、東方の学者たちはそれぞれに宝をもってイエス様に捧げて拝む、そして皆喜びの内にいるクリスマスを私たちはイメージしがちです。マタイ福音書が伝えるクリスマスの物語には、救い主イエス様が誕生した、その喜びに満ちあふれた様子だけでなく、同時に寒々しい、悲哀に満ちた暗い闇が描きだされています。当時のユダヤ地方の王であったヘロデ大王が、新たに生まれた王を探しだして、殺そうと考えているということが天使によって父ヨセフに告げられ、そのことによってイエス様は難を逃れました。しかしそのヘロデの殺意は、ベツレヘムに生まれたすべての幼子へと向けられたのです。ここでクリスマスの物語は真っ暗に染まります。ヘロデ大王が、ベツレヘムに住む二歳以下の男児を一人残らず殺させたという、幼児虐殺が起こったことをマタイによる福音書は伝えています。

神様の支配を受け入れず、自分がすべてを支配しようとする。ヘロデの権力は限られていました。ローマ皇帝によってユダヤ地域の支配を認められているにすぎない。けれどもその自分のテリトリーで、神のようになることを求める。ここにヘロデの罪があるのです。そしてその罪はヘロデだけの罪ではありません。ユダヤ人は、イエス様を自分たちとは関係のないものとし、拒絶し、最後には殺してしまうのです。わたしたちは、どうでしょうか。キリスト者であっても、イエス様を自分の王として受け入れ、その支配に身を委ねることができないのがわたしたちの現実なのではないでしょうか。

神様の愛する独り子イエス様は、そのような私たちの罪をご自分の身に背負って、私たちのために、本当は死ぬべきは私たちであるのに、私たちの身代わりとして死んで下さったのです。

「自分とは関係ない」そう思っているわたしたちの所に、神様はイエス様を送ってくださったのです。限られた領域の中で、自分が王として、自分自身の支配者として君臨しようとする私たちに、限りのなく注がれている愛を知らせるためにです。この神の愛を知らされた時、わたしたちはもはや無関係ではいられないのです。



(2018・12・30 説教者：稲垣真実)